孩子花金瓶梅

江苏工业学院图书馆
藏书章

大之の二十

鏡花全集　巻二十　第二十回

昭和十六年五月二十日　第一
昭和五十年六月　二日　第二

著者　泉鏡太郎
發行者　岩波雄二郎
〒101　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發行所　株式會社　岩波書店
電話（〇三）二六五－四一一一

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1975

目次

柳の横町（大正八年五月）……一
手習（大正八年九月）……一四
縁日商品（大正八年九月）……一七
伯爵の釵（大正九年一月）……一九
賣色鴨南蠻（大正九年五月）……二三
瓜の涙（大正九年十月）……二七
榲桲に目鼻のつく話（大正九年十月）……二九
唄立山心中一曲（大正九年十二月）……三四

柳の横町

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「三郎……」

「……」

「三郎、やい。」

「あゝ、甘藷か。」と返事と一所に仰向に反つて、プウと頬邊で呼吸を吐いて、面中圓く成つたのは、鍛冶屋の小僧で。裸體で船を漕ぐやうに、出張つた棚尻で調子を取つて、肩で鞴を吹いて居る。此の顏色と容體は、視る人の想像に任せた方が早い。出額の猿眼、炭俵から這出した野良猫に宛然なのが、背腹を飜して、のいと搖つて、息を吸つては鞴を壓す、壓すのを引く時ぺろりと赤い舌を出して上唇を舐め上げる、が、鼻まで屆く。……惡く言ふのではない、其の辛勞を惟ふので、試つて見るが可い、此のくらゐ骨の折れる退屈な者は殆ど有るまい。舌を出すのは喘ぐので、器械よりは其の舌で火を吹くに齊しいのである。火も又呼吸をする。土間に雲の峰を崩して堆く積んだ石炭が、颯と赤く氣を引いて、爛と蒼い炎を吐く、小僧の舌がぺろりと出る。……

一

と言ふもので。朋輩弟子の「三郎」と呼ぶのが、丁ど其の舌の時だと、直ぐには「……」返事が出來ないので、奴じぶくるのでは無いのである。

「見や、三郎と言へば甘藷かと言やがる。……立眠りをしながら、おやつの夢を見て居るんだ。あはゝ、薩摩の亡者がお精靈様に呼ばれたやうだ。」と、頃しも七月の上旬で、お盆が近いから、精進ものの水ッぽい洒落を言つて、クスリと灰色に笑つたのは、伍八と言ふ年上もの、脊のひよろり高いのが、黒とも鼠とも差別の着かない、縮の洋袴の、灰と油で、てら〳〵に光つて汗ぐるみ、溶けた鉛に成つて、流れさうなのを穿いて、股の裂目へ、薄汚れた手拭をぶらりと提げたのが、鐵槌の頭を、づッしりと肩に當て、兩手を向うへ、ひよいと輕く、柄長に擔いで立つて居る。顱割の鼻挫げで、頭の大い、逆さ眉毛、竹田人形生のものの朋輩の伴吉が、同じ鐵槌、柄を返して土間に突いて、

「戸外へ、濕りをくれろッてんだい、やい三郎。」

「(さぶ)ぢや無え。」

と伍八が、くだらなく又洒落れて、

「暑いんだ、と言や、夏だと言ふだらう……夏の暑いのは承知だけれどよ、砂ッぽくつて堪らねえ。昨夜食つた蒟蒻の化物だ、水を打つて鎮めてくんねえ。」

「うむ。」と反つて、舌を吐き、仰狀にペロリと遣つて、
「水を撒くのか、往來へ。」
「然うよ。」と、伴吉が頤で頷く。鞴をふう〳〵。
「詰らねえや。」
「何を、」
「こん、畜生。」
「だつてえ、可厭だあ。」
「あれ、止せと言つても、間を盗んぢやあ水惡戯をするんぢやあねえか、機關野郎。何が可厭だい。」と、我が槌で肩を小突きながら、伍八が故と可恐らしく睨むと、小僧は口を尖らして、
「それだつてえ、今、此處ン處へ水を撒くのは、あの何ですよ。あの……盛砂に番手桶で、恐れ敬つてですよ、あの、裏町の待合へ出合に行く彼等をお迎へするやうなもんだからですよ、癪に障りまあす、可厭な事た。」
「何を言やがる。」
と此の時、沈んだ落着いた聲を掛けたのは、其の三郎を鞴に立たせ、伍八、伴吉を槌に廻して、横座にむずと腰を据ゑつゝ、仕事の小間の、膝頭に手を組んだ、見るからに、筋肉、骨格の逞し

い、小柄ながら三分刈の旋毛のきり〳〵と締つた、年紀は少いが兄弟子で、内の親方は平二郎、越後の三條の出だけれども、此は子飼から混りのない、鐵で鍛へた金助とて、芝神明樣のちやきちやきの氏子である。

二

平常は、無口で、不人相で、起居もづッしりと重い、が、氣の優しい親方おもひの、賴母しさは、旱に黑雲を見るやうなが、仕事と喧嘩は電光より激しく、饒舌よりは、手が働く。三十日が月夜でも緣日が宵の間でも、癇だと成ると何も言はずに、敵手の頭へ、突然コッンと拳骨を喰はせる。鍛冶平が許の……（ゲン金では意味を爲さない。）……骨金と稱へて、芝口界隈に是沙汰の小兄哥。……

恁う、もの言ふ時、自から眉が顰んで、少し下唇の出る癖がある。……

「三坊、」

「あゝ。」

「何を言やあがる。……藝妓が内の前を通るからッて、其ぢやあ掃除も出來ないぢやないか。」

伍八が又傍から、

「天から雨を降らせるのは是如何にだ？……」
「それ、然りよ！……（と件吉が引取つて、）縁日に降雨があつたつて、誰も神明様が水をお打ち遊ばされる、とは言やあしねえぜ。」
「ですけれども、そりや何ですけれども、あの……此の近所の藝妓や、女中や、お客やら、若衆やら、そりや、手を曳いて歩行いたつて、そりや構はないけれども、何ですよ、何處からか來やあがる、あの、お屋敷野郎が、あれですよ。……今の前通りましたからね。……最う些とすると、あの、屹と又例の婦が、しよな〳〵と遣つて來るんだもの。——其の中へ、あの……」
「何、野郎が通つた——待ちな〳〵。や、其の中へ……と然うすりや、水をさす事に成る。もの は取りやうだ。……水をさす事に成る。——面白い！……此奴は三坊の役おやあねえ。俺が一番買つて出よう。が、何か、確に例の野郎は通つたか。」と、伍八は鐵槌をドンと下す。
「通つたにも、直今だよ。」……あれ、（見なかつたか、）で、三坊はギヨロリと目を剝く。
「可し。」と氣勢つて、其の鐵槌を横倒しに、油ぴかりに洋袴の股で、何故か兩手を引擦ると、ぶるッと一つ臀を揺つた、乘氣の足つき、土間に轉がつた片手桶を取ると、ひよいと、敷居を跨いだが、三時下りの未だ日盛りで、横町は、見透しの鐵道線路の踏切の前途まで、火の鐵橋を渡したやうである。

然ればこそ仕事の小休憩にも、鞴の傍を離れねばとて、外へ出て涼まうとはせぬ。此の邊は所謂(横町に一ッづゝある芝の海。)を近年埋立ての新開町で、線路を越えた一廓は、新しい料理屋、待合、藝妓家に交つて、煙草屋の店に古いまゝの(釣竿あり)の札はまだな事、蜜豆、駄菓子屋の軒に、外すのを忘れた、投網、貸船の破行燈が、火除の禁厭と誤たれ、電信の線に凧の骨の殘つた形で、引掛つて居る土地柄ゆゑ、貝殼は煎りつく、砂は燒ける。一通りの暑さでない。

夜の涼しさは別にもせよ、……此の中にして、鐵を爛らし、火の山を煽ぐ、鍛冶屋が構へ、店から續いた黑板塀に、ものの不思議と言つても可からう、……見上げるやうな一株の、鬱然たる柳がある。根は隱れて、塀の穴から、太さ一抱への幹ながら、優にしなやかに立顯れつゝ、縋るものの欲しさうに、平屋の空高く屋根を包んで埃も浴びず蒼々と茂つて居る。朝霞夕霧には、ほんのりと、釣船の幻が映るであらう。……もと此のあたりは掘割であつた。

柳に聞け。……世の面影の變るのは、人の生命より尙ほ儚い。……

葉影をたよりに、塀際に、渡船待つ間の風情して……婦ならば嘸ぞ姿、柳に縋つて、露もあらば吸ひたさうに、色も憧憬れた狀に彳んだ。可三十歳の男が一人。

「や、居る〳〵。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

三

伍八は突戻されたやうに、一度慌しく引込んだが、「何、居るか。」と乗出す伴吉の逆眉毛を、頤で掬つて、

「板塀に這つて居やがる、蛞蝓野郎。」

「何處だい、何處に。」

と鐵槌を引摺り〳〵、肩を揉み〳〵泳出す伴吉と一所に、ひよこりと又敷居を出た。唯伍八が目で見當を教へながら、

「鹽でなくつちや利くめえか。」と低聲で言ふ。

「蛙ぢやあ無えから、水だつて些とは利くよ、二三杯浴びせて遣れ。」

「衣服へなんか浴けるなよ。」と、大砲の彈丸に脚を着けたやうな鐵床を前に控へて、背後向で、見返りもしないで言ふ、金助の言も耳には入るまい。

伍八は、軒下に据ゑた、緣に鐵板を張つた四斗樽の灰汁の水を、片手桶に引掬ふと、伸せば手が屆く表通、芝口の電車道へ向つて、先づ颯と撒いて、「こらしよ。」と拍子の返す手で、――向側は電機工場の裏手の羽目板へ打覆けた。が三杯目こそ、本能寺で、些と間があるから腰で撓めて、

ザッと投浴せに奮ませる。

水は柳の塀下へ、等の流るゝが如く濡れて散つた。

「何んなもんだい。」——

爲まじきものは繼である。人を待つ身にや何が成る……某大學出の學士が成る。……內職の飜譯、私立のお雇で活計を立てる、今岡敬之助は、旦那ならず、客ならず、道ならぬ、かくれた首尾の婦を待ちつゝ、心は梢に上の空、魂は葉にも据わらぬ空蟬の藻抜けなれど、冠つた麥藁は蝸牛の殼ではなく、縞の單衣は汗ばんでも、蛞蝓ではないのである。

申譯だけ、絽の羽織も被けて居た。

敬之助は素足に掛つた水の飛沫に、氣を打つて、唯、伍八等が、頭髮に煤煙を立てつゝ我が顏を見るのに心付くと、其のまゝ散歩下駄を引摺つて、蕨のやうな洋杖を突反らすまでの擬勢も無ささう、柄を肱に掛けて、痩せた肩を窄めながら、追はるゝ體に、柳の下を離れたが、引返せば鍛冶屋の前だし、行前は線路の踏切。

其の踏切に近づくと、やゝ西に傾いた陽は、暑さに赤い色を染めて、線路は宛然炎の砂の流れである。

向側の踏切番が、心優しく、小屋の前に、松葉牡丹とカンナを植ゑた、濃い黃と眞紅なのも目

には眩い。——戀に、思ひに、身も窶れ、氣の衰へた體には、毒する蟲、怪しき鳥の如く、花の色も面を射るので、其處までは踏切られぬ。

敬之助は踏掛けた線路の足を退いて、爪立ちつゝ、いま潑水の泥を掬つて、足の甲に掛つたのが、點々痂の如く早や乾いたのを觀て、不快な色して、洋杖を杖に、蹌踉と片膝を上げながら、袂から手巾を出して、はた〳〵と拂いた。

工面の惡さうな風采を視れば、其の手巾の淸らかなのも可哀である。

打合せた婦を待つて、此から二人で行く家で、「水を。」で、快く足を洗ふほどの勢も無いらしい。

倒れるなよ。

忽ち破れるやうな蟬の聲、途端に風が留まつた。が、恰も耳元で增上寺の鐘の唸るが如く蟬の聲が響いたのである。

敬之助は、果して、肩を震はすまで、驚いて振向くと、鍛冶の職人は廂から引込んだが、唯じりじりと目に沁み、耳に沁む炎天を飛んで、一匹何處から外れて來たやら、したゝかな油蟬……鳴く其の風の無い柳の繁りは、宛然空に大なる釣鐘を掛けたやうである。

四

「待てよ。」と伍八は、土間で、腕を組んで一つ頭を振りながら、
「狀あ見ろと、水をさした處は可いが、此でけちが着いて、婦の來やうが遲く成つて、待遠いのも中ぐらゐだぜなあ。」
「眞個だ、あの、書生坊にやあ可い氣味だけれど、遲いのはまだしもよ、出掛の首尾が惡くつて、全然來なく成つて、別嬪が見られねえぢやあ詰りませんや。」——と伴吉が伸びた頭髮を掴手で搔上げる。
「野郎を突流して構はないと成りや、身投の心中は助ける方が割が可い、としたものだ。何しろ、美い婦だ、が、何だらう。……藝妓にしちやあ高尙だし、素人にや意氣過ぎる。……馬鹿に色つぽくつて、其の癖、内氣らしい、……然うかと思や、」
「何だ、有りつたけ並べて居ら。分りませんとも。此間もね、左裏で、湯歸りの藝妓と、料理屋の女中が立話をして居たがね——目に立つッて無いから此邊で評判らしいや、——貴婦人かてんだ。貴婦人、な、分つたらう。何處か、好い處の奥樣かとよ。其にしちや出合が、お手輕過ぎるが分らないねえ。あの目のふつくりと大いのを一度見たら忘れるもんぢやあない。一寸其の目を借りて見たら分るだらうと、然う言つてな。」
「藝妓がかい。」

「あゝ、裏で女中と立話よ——眉毛は少し厳いやうだし、口元も心持大きいし、難を言へばあるけれど、襟脚のすつきりした、肩のすんなりと色氣のある處が何とも言へない。第一塗つても居ようけれど、あのくらゐ、色の白いのは澤山ない、透通るやうだツて言つてたんだ。」

「嬉しい！」とひよこと伴吉を拜んだ伍八も、拜まれた伴吉も、互に煤弗の羅漢の迷兒で、婦の膚の白さをば、取分けて言ふのが、我ながら變だつたか、面を見合せてニヤリとした。時に散らかつたコークスを引撮んで拾つては、頰邊を敲いては、鞴へ投込み投込みしつゝ、話半にして、洋袴の脚を踏伸ばし、片肱を土間に支いて、長々として居た金助が、脊筋を畝つて、むくと起きて、此に苦笑をする時、仰向の小僧の鼻は、穴の裡まで黑かつた。

「髮もすら〳〵艶がある、心持薄いのが惜い……と言ふものの、あの位形を好く結つたのは餘り見掛けない。銀杏返しも、まあ、然うだけれど、白い手柄の品の可い、涼しらしい圓髷の時が、一層婦でも震ひつきたかつた。（何だらうね。）ツて言つて居たから、あの連中だつて分らないんだ。……（妾か知ら。）（苦勞があるね、面窶れがして居るよ。）（お互樣。）と背中を敲き合つて、藝妓と女中は別れたつけが——分りませんや。……一番賭で行きたいもんだ。ねえ、金兄哥。婦の身元素性をさ。」

金助は最う一息、むく〳〵と身を起して、

「賭なら來い。」とぶッきら棒。が、意氣込が強いので、
「え。」と伍八まで釣込まれる。
「來るか、然うすりや、私が只取だ。」と、眞圓い目をクワッと睜る。骨金の串戲は、恰も朋輩を
睨むが如し。
一時に二人が蹲んだ。
「私あ知ってるんだ。芝の山内に大きな料理屋があるだらう。藝妓要らずに、皆踊のうまいのや、
唄の上手な、綺麗なのが揃ってると言ふぢやねえか。新造も年增も。……御殿がかりで靑錦樓と
か言ふんだとよ。——彼處の姐さんだい、あの婦は。」
あ、あ……然うかと、伍八は蛙飛びに腰で飛び、
「道理で、道理で、此處等は道筋だ。もみぢ山の靑葉の中から、鷺だか時鳥だか飛んで來やがる。
……山内を拔けて大門通りを、金杉かい。此奴が電車で來る時だ。」
「最う一つは、辨天池から公園を拔けて、芝園橋、西應寺町、斜違ひに步行いて來りや、……ソ
レ、つい、……あ、そら、其處へ……其處だ、あゝ、」と、指す。
「や、來たか。」と、發奮んで引向く。伍八の背中を、撲はして仲吉が、
「慌てるない。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo